特集 戦争を知らない世代へ

8月15日は終戦記念日です。終戦から64年、戦争を体験された方も次第に少なくなってきました。しかし、私たちは悲惨な過去を繰り返してはいけません。今月号では兵役を経験した下元さんにお話しいただいた当時の様子をお伝えします。

下元博三上等兵の生還

下元博三さん（90歳・香北町吉野）

兵隊になるまで

私は、大阪の尋常高等小学校を終え、母の「くだもの屋」を手伝い、白滝鉱山などに勤務し、昭和15年8月、善通寺の輜重第11連隊で教育を受けて召集解除になりました。この輜重隊とは、戦闘で消耗する弾薬や食糧を補給する部隊です。

昭和16年3月、大阪海員養成所に入所し、第55期生となり、日本郵船籍「伏見丸」にも乗りました。

召集される

昭和17年7月、善通寺第11師団に召集され、8月には中支の漢口で、独立輜重第2連隊に転属。中隊長は少尉、小隊長は見習士官の小隊員で、上海からラバウル航空隊で有名なニューブリテン島のココポに駐屯しました。

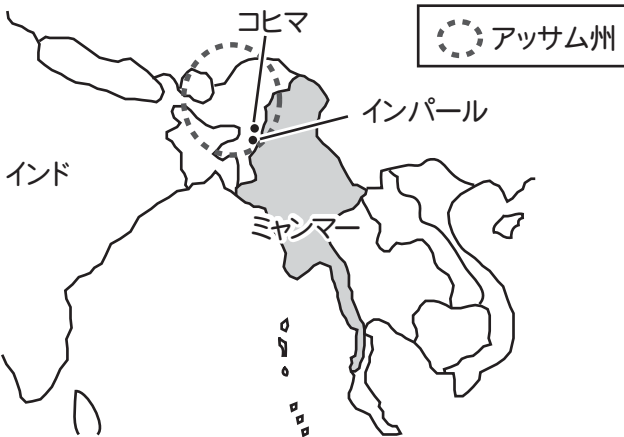
昭和18年9月、ラバウルからビルマ（現ミャンマー）に入国してマンダレーに集結しました。昭和19年3月、インパール作戦の第31師団の輜重部門を担当しました。コヒマの砲声が聞こえる所まで、砲弾を背負って運びました。撤退時、マラリアと脚気で体力が衰え、倒れて意識不明となるような体で世界有数と言われるビルマの雨季の中を、引き返しました。戦闘部隊は雨季の最盛期に遭い、この世の地獄を見たと言われています。

インパール作戦

日本の兵隊がインドに進攻して戦ったことを、今の日本人でどれほどの人が知っているでしょうか。紅茶で知られるアッサム州へ、アラカン山系の2千から2千5百㍍を山岳登山のような格好で越えて、野戦要塞の英印軍に攻撃をした戦いでした。司令官の無謀な命令、抗命事件で知られています。

私たちは、約1カ月を要して2発の弾を届けました。敵は、砲弾1万発を1時間で撃ち、日本軍は、日に3発を撃ち返したそうです。こんな戦いで3万6千3百名（作戦に参加した約55％）が、アラカンの土になりました。

ビルマの風土

ビルマの雨期は、6月から始まり10月頃まで続きます。最盛期の雨はホースで水をまくようなもので、「凄い」の表現しかありません。「ゴーッ」と音がし、一面が濁水に覆われるのです。大木が倒れて流れ、家も流れていました。

集落は高台にあって高床式で安全ですが、英軍の空襲は集落が中心で危険でもありました。また、乾季の冬場には国土は砂漠となり、水は限られた所でしか得られません。当時の日本人は、「えらい所に来た」と誰もが思ったと思います。想像を超えた世界でした。国民は仏教徒で農民が多く、親日的な善良な人たちが生活をしていました。作戦地域のアッサム州は熱帯の山でも夜は寒く、日本の植物に似たものが見られました。

疲労困ぱいまで

昭和20年6月、集結命令のナコンナヨクへの道に苦闘していました。雨季が始まっており、体力は限界にありました。この頃は、飢えているのに食べ物がノドを通りません。昼夜の判別もできず、砲声や銃声が近くにあっても、遠い世界のことのように感じました。低地の泥道は膝を没し、一足を運ぶ苦しさは経験のないもので「もう止めよう」と止まると、伍長の青竹に打たれます。「ここで倒れたら犬死だぞ！」こう叱る伍長も、体の状況は私たちと違ってはいなかったのです。ここまでに見てきた戦友の姿を思い、気力を振るい立たせるのですが、これにも限界があります。「こんな苦しい毎日がいつまで続くのだろう。いずれ死ぬが、早いか遅いかの違いだなあ、骸（むくろ）をさらしていた戦友は楽でいいなあ」と、そう思うようになるのです。

栄養失調とマラリア

日本軍の指導者は、戦闘重視で、輜重兵や通信・病院などの後方部隊は軽く見られていました。国力の差もあって、敵の武器でも戦い、敵の食糧を食べるのが、ビルマ戦の実態でした。山岳ジャングルに7万余もの食糧があるはずもなく、幹部の一部を除けば栄養失調の病人で、これに風土病のマラリアが加わりました。発熱は40度を超え、太陽の下で毛布を何枚着ても寒く、4～5時間ガタガタ震えて、熱が下がる時は身体を火の柱が貫けるように感じました。汗が流れて体力を消耗し尽くしました。

赤痢や皮膚病もあって、戦闘よりも病気で倒れた人が多いように思います。

白道を行く

引率の伍長が限界を感じたでしょう。民家に入って休むことになりました。床に倒れ込んで、暗い穴に引き込まれる感覚で夢を見始めました。

辛かった体が楽になり、浮き上がるような感覚でお花畑が見えます。「きれいだなあ」と思いました。花はガラスかパラフィンに色が付いているような透明感のあるもので、赤白黄が一面に広がっています。遠くは白い霞がかかったようで、春の花畑を歩いているようなものでした。その他にも何かを見たように思いますが、今では思い出せません。

突然肩や胸が圧迫され、苦しいので目が覚めました。誰かが私の上に乗っていたのです。戦友が言いました。「下元、お前は死にかかっていたぞ」と。

上に乗っていたのは、産婦人科の軍医で、たまたま通り掛かったものと思われます。人工呼吸をしてくれたのでした。

こうして戦友や軍医、運にも恵まれて命を保ちました。ここで学んだことは、「あれが死であれば、栄養失調と体力の消耗での死は、そんなに苦しいものではない」ということです。

復員船での騒動

昭和21年6月中旬、プノンペン沖で復員船「辰春丸」に乗り込みました。4年ぶりの日本です。船内は日本の香りがあるようにも思えました。船旅は故国への希望の出発でもあったのです。

この船が台湾沖を航行中のことです。知らない兵隊ですが、上司に仕返しの暴行を働いたようです。軍隊とは、理不尽なところで下級兵士は、よくイジメを受けました。将校と兵隊では、食事内容も違うのが当然で、下士官でも恨まれる者があり「誰か海に落とされたらしい」そんな話もささやかれていました。軍隊が無くなり、上陸すれば各地に散りますので、船内でウップンを晴らしたと思われます。

兵隊時代を振り返って

私の育った頃は、日本男子に生まれたら、兵隊になるのは当然の時代でした。兵隊は命のやり取りをするのが仕事で、厳し過ぎると思われる指導も受けました。風土の違う土地で懸命に働いたつもりですが、我が青春を燃やした「戦争」とは、何だったのでしょう。内外に不幸な人たちを生んだだけです。幸いに私はビルマに骨を埋めることにはならず、鹿児島の引揚者援護局で「ごくろうさまでした」の一言で終わりでした。

日本の国は、たいへん美しい国です。国の内外で若者が兵隊になるような時代は、来てほしくないものです。日本は平和で美しい国のままで継承されてほしいと思うのです。

非核・平和宣言都市香美市

香美市は、核兵器の廃絶と平和を願うすべての人々と相携えて行動することを決意し、平成18年5月25日、『非核・平和都市』宣言を行っており、『日本非核宣言自治体協議会』に加入しています。

黙とうを捧げましょう

広島市原爆投下日
8月6日午前8時15分

長崎市原爆投下日
8月9日午前11時2分

終戦記念日
8月15日正午